

つばさ 55

2019年初夏号
令和元年6月発行
第15巻第1号
(通巻55号)

地域医療を考えるペガサス情報誌

Special

地域と一緒に、地域が
必要とすることを。

医療的ケア児と健常児がともに過ごすペガサス保育園つばさの挑戦。



病気の人も、障害のある人も、 子どもも大人も、共に暮らせる 地域社会をめざして。

国は今、高齢者を地域で支えるために、
地域包括ケアシステムの構築を進めている。

これは、医療、介護、予防、

生活支援サービスを切れ目なく提供し、

高齢者の地域生活を支援していこうというものだ。

そして、その先に、国が描いているのが、

高齢者、障害者、子どもなどすべての人々が、

相互に尊重し合いながら、

共に安心して暮らせる地域社会づくりである。

そうした地域共生の社会を実現するには、



ヘガサ保育園つばさ 園長
保育士
清水 従子



樋上小児科アレルギー科
副院長
樋上 敦紀先生



樋上小児科アレルギー科
院長
樋上 忍先生



家族や地域コミュニティの助け合いだけでなく、さまざまな組織や行政などの「支え合い」が必要である。ペガサスグループはそのように考え、自分たちができるところから新しい挑戦を始めている。その一つが、「ペガサス保育園つばさ」の開設である。この保育園では、病気の子とも健康な子どもが分け隔てられることなく、そして、子どもたちはお互いに助け合い、良い刺激を与え合いながら、たくましく成長している。その世界はとても小さいが、ここには、これから日本がめざそうとする「病気を抱っていても、障害があっても、地域で一緒に暮らしていける地域社会」を作るためのヒントが詰まっているといえるのではないだろうか。



ペガサスレスパイトケアセンター
看護師
藤田 里美



馬場記念病院
理学療法士・主任代理
福嶋 ゆかり



ペガサス保育園つばさ
看護師
永瀬 由起子



ペガサス保育園つばさ
保育士
袴田 桂子



1年間で 大きく成長した園児たち。

平成31年3月22日、桜の蕾も膨らんできた春の日、ペガサス保育園つばさの第一回卒園式が行われた。卒園するのは、ひかり組（2歳児クラス）の合計8名。そのうち健常児は4名、医療的ケア児（※）は4名だ。まずは、保護者と共に晴れやかに巣立っていった子どもたちの成長ぶりを紹介したい。

※医療的ケア児とは、先天的な病気や障害を持って生まれ、生活するなかで痰の吸引や栄養剤の注入などのケアを必要とする子どものこと。
新生児医療の進歩に伴い、医療的ケア児は増加しており、全国で1万8000人を超える。

**自分で食事できる
ようになった
はる君。**

卒園していく子どもたちの一人、はる君の病気は、先天性肺静脈狭窄症（肺静脈が先天性

に狭窄している疾患。多呼吸、体重増加不良などの症状がある。気管切開をしているため、話すことはできないが、愛らしい笑顔で園の人気者だ。

はる君は、病気の影響で口腔内の感覚に過敏症状があり、入園当初はスプーンを口に入れる



堺市初の試み、「ペガサス保育園つばさ」。

ペガサス保育園つばさは、平成30年4月、堺市で初めて誕生した、医療的ケア児と健常児と一緒に過ごす小規模保育園である。平成31年3月現在、0歳から2歳(※)までの幼児が21名。そのうち医療的ケア児が6名、健常児15名が在籍。保育士は5名、看護師は2名、それに園長を加えたスタッフで保育を行っている。

※特例として3歳児1名を含む。

のを極端に嫌がった。ミキサー食をスプーンで食べさせようとしても、「ウエツ」とえずいてしまうのだ。それが2カ月ほどして、驚くことに、スプーンを自分で持つて食べられるようになった。その奇跡を可能にしたのは、何だったのだろうか。ひかり組の担任である袴田桂子保育士は、「やはり毎日、健常な子どもたちと同じテーブルを囲むのが、良かったんだと思います。健常な子どもたちがスプーンを使うのを見て、『自分で食べたい』という

気持ちが出てきたようです。今ではご飯の量が足りなくないくらいで、全部しっかり食べています」とうれしそうに話す。

はる君の食事風景を見せてもらった。はる君は、口に入れて飲み込むたびに、保育士や看護師たちに「あーん」してみせる。「オツケー」と言われると、また、次のスプーンを口に運ぶ。「食事介助で一番注意しているのが、誤嚥しないようにすることです。一口ずつ、なくなることを確認しています」と袴田は話す。はる君は今、ミキサー食から、さざみ食への練習を始めているところだ。

はる君の成長は、食事だけではない。嫌がっていた歯磨きができるようになったし、おむつは取れないものの、友だちと一緒にトイレへも行けるようになった。はる君の母親はこう話す。「『トイレでうんちでたよ』と教えてくれるようになったのは、すごくうれしいですね。言葉は出ないけれど、あー、あーと声を出せるようになってきましたし、保育園で習ってきた手話を使って、『おやすみ』も言えるようになりました。お友だちと同じように生活して、随分たくましくなったように感じています」。

「病気の子も健常な子も、何の偏見もなく仲良くなれます。子どもの力は本当にすごいですね」と袴田。



担任の袴田保育士や保護者らに見守られ、ひかり組(2歳児クラス)の子どもたちは初めての卒園式に臨んだ。その姿は、初々しい愛らしさに包まれていた。

大声で笑える ようになった さきちゃん。

もう一人、卒園していく子を紹介したい。さきちゃんは先天性筋ジストロフィー（出生時期から筋力筋緊張が低下している疾患）を患っており、保育園でも専用の保持椅子に座って過ごす。

「最初は、お人形さんのように表情がありませんでした。でも、さきちゃんが登園してくと、健常なお友だちがみんな、『さきちゃん、さきちゃん』と集まってくるようになり、少しずつ表情が出てきました。今は、自分がかまってもらえないと、声を出したり、泣いたりして、さきちゃんなりに自分の感情をアピールできるようにになりました」と、袴田。さきちゃんは、身体的にも大きく成長した。最初は、保持椅子に座ったままの状態、関節も固く、手足を動かすことはなかった。それが今では、両足を上げてバタバタと動かすようになった。袴田は言う、「さきちゃんが手を上げると、お友だちが『おもちゃを貸してって言うてるんかなあ』と、い

ろんなおもちゃを持ってきて渡そうとします。手足が動かせるようになって、周囲とのコミュニケーションも豊かになってきましたね」。

さきちゃんの母親も、その変化に目を丸くする。「以前は、ずっと私と一緒にでした。療育園にも通っていましたが、保護者の付き添いが必要なので、ずっとそばにいて、代わり映えのない日々を過ごしていました。それが、ここに通うようになって、親から離れ、新しいお友だちと出会い、ものすごく変わりました。おうちでも自分の思いを表現できるようになり、何かうれしいことがあると、すごく大きな声で笑うようになりました。かかりつけ医の先生からも『だいぶ変わったね』と言われます」。

さきちゃんの母親は現在、下の子を出産して休暇中だが、いずれは仕事に復帰する予定だという。「さきにつきつきりなので、仕事を辞めるしかないと思っていました。が、続けられそうです」と笑みを浮かべる。医療的ケア児の母親が就労できるように支援することも、ベガサス保育園つばさの大きな役割なのである。

試行錯誤しながら、初めての園長職を担ってきた清水。この1年を振り返り、「毎日が緊張の連続でした」と語る。



挨拶に立った園長の清水。

「この日を無事に迎えられ、感謝の言葉しかありません」と、保護者や関係者、職員に感謝の気持ちを伝えた。



「ご卒園、おめでとう」。理事長の馬場から、お祝いの言葉に続いて、一人ひとりに修了証書が手渡された。

医療的ケア児と 共に過ごすことで 健全児も大きく成長。

ペガサス保育園つばさで成長したのは、医療的ケア児だけではない。健全児の保護者からも「子どもを預けてよかった」という感想がたくさん寄せられている。その内容は、「とてもやさしい気持ちで育ててきた」「思いやりのある子になってきた」というものだ。

園長の清水従子保育士は語

る。「当園の素晴らしさは、医療的ケアの子どもが健全な子どもから刺激を受けるだけでなく、健全な子どもたちもまた、医療的ケアの子どもからいい影響を受けているところです。健全な子どもたちは障害のある子どもが困っていると自然に手を差し伸べますし、医療機器のチューブがあれば、それをひっかけないように注意します。そういう気配りが自然にできるようになることは、その子どもの成長においてかけがえのない財産だと思います」。



ペガサス保育園つばさが預かるのは、0歳から2歳児まで。この日、卒園する医療的ケア児は引き続き、隣のペガサス保育園へ。健全児たちもそれぞれ保育園や幼稚園へ入園することが決まっている。



子どもたちの歌が披露されると、保護者のなかには、うっすら涙を浮かべる人の姿があった。
わずか1年間の生活だったが、それぞれの胸中にさまざまな思い出が湧き出していた。

多職種が連携し、 医療的ケア児の生活を守る。

痰の吸引や栄養剤注入など、継続した医療的ケアを必要とする子どもたち。その日常生活の安全が守られるように、ペガサスグループ内はもちろん、外部も含めて、さまざまな専門家の力が結集されている。

やインターネットで情報を収集し、しっかり勉強しました”。

永瀬は、医療的ケア児が登園してくると、それぞれが家庭で測ってきた体温やサチュレーション（動脈酸素飽和度）などの値を確認。母親が記入したノートの内容も確認し、一人ひとりの体調を確かめる。その後に行う看護は、気管切開部の管理、痰や唾液、鼻汁などの吸引、経管栄養（胃や鼻からチューブを通して水分や栄養分を提供する）、呼吸器の装着など、多岐にわたる。また、みなまでお散歩に行くとき、呼吸不全に備え、酸素濃縮器のリユックを背負うのも看護師の役割だ。「急に泣いたりすると、何が原因か探るのに苦労することもあります。でも、保育園の看護は、かわいい子どもたちに囲まれて、楽しいこ

医療的ケア児の

6名を支えるために 2名の看護師が常駐。

ペガサス保育園つばさには2名の看護師が常駐し、医療的ケア児のお世話をしている。さきちゃんの母親も、安心して預けられる理由の一つとして、看護師の存在を挙げる。「さきは痙攣を起こしやすく、いつ起きる

かわかりません。ペガサス保育園つばさには、看護師の方が常にいらつしゃるので、安心です”。

その一人、永瀬由起子看護師は、馬場記念病院・北館4階病棟から志願して、ペガサス保育園つばさにやってきた。「子どもに関わる看護がしたいとずっと思っていたので、つばさの開園は絶対の機会でした。ただ想像していた以上に難病のお子さんが多かったのです、最初の頃は文献



食事するときも、お昼寝するときも、医療的ケア児と健常児が一緒に部屋で過ごす。



「リハビリテーションを通じて、成長していることが目に見えてわかります。それが大きな喜びですね」と、理学療法士の福嶋は語る。

とばかり。一人ひとりの成長が一番の喜びです」と目を細める。

医療的ケア児に

対する

リハビリテーション。

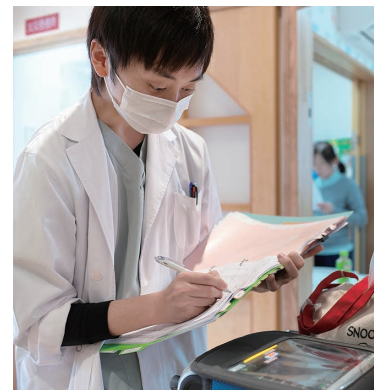
関節が固くなりがちな園児には、リハビリテーションも提供されている。たとえば、寝たきりの子どもには、保育士たちが毎日のように、足首を曲げたり、指を一本ずつほぐしたり、両足を持ち上げて股関節から動かす可動域訓練を行っている。その可動域訓練を指導しているのは、馬場記念病院・リハビリテーション部訪問支援員の、福嶋ゆかり（理学療法士・主任代理）である。ペガサス保育園つばさの支援では、福嶋の他、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士もメンバーに加わっており、必要に応じて訪問している。

「保育園の先生方は保育のプロではありますが、医療は専門外です。そこで、抱っこ仕方、関節の可動域訓練などを伝え、日々、実践していただいています」と、福嶋。その他、保護者の依頼に応じて、週に1度、もしくは2週間に1度、保育園を訪問し、直接、医療的ケア児のリハビリテーションも行う。「リハビリ

馬場記念病院の専門家たちのサポート。

ペガサス保育園つばさの昼食やおやつの献立を考えているのは、馬場記念病院の管理栄養士たちだ。管理栄養士たちは、子どもたちのアレルギーなども把握し、おいしいメニューづくりに力を注いでいる。その献立は、園内の調理場で作られ、できたてが提供される仕組みだ。健常児は普通食、医療的ケア児にはミキサー食やさざみ食が提供されている。

馬場記念病院の臨床工学技士も、サポーターのメンバーである。臨床工学技士は、人工呼吸器を持参してくる子どもがいれば、必ず登園し、機器を厳密にチェック。安全に過ごせるように、縁の下で支えている。



ながら取り組んでいます」。

小児科の専門医に

いつでも気軽に

相談できる体制。

テーションの目的は、医療的ケア児が少しでも集団生活に参加できるようにすること。たとえば座位が不安定な子は、一人座りができるようにすれば、読み聞かせやお歌の輪に加わることができます。補助具も選定しながら、どうすれば楽しく過ごせるようになるのかを探っています」と福嶋は話す。普段は成人を相手にしている福嶋だが、子ども向けのリハビリテーションでは何か違いがあるだろうか。「子どもはみな、未知数の可能性を秘めています。その可能性をどこまで伸ばせるか、お子さんの人生を背負う責任を感じ

園児たちの健康状態については、小児科の専門医にいつでも相談できる体制が敷かれている。それが、園医を受け持つ、樋上小児科アレルギー科の副院長・樋上敦紀医師である。樋上医師は大学卒業後、大病院のPICU（小児集中治療室）に長く勤め、発達障害の外来も受け持っていた。重症心身障害児の診療において豊富な経験を持つ。

今回、園医の依頼を受けた際、樋上医師は「何かあればいつでも連絡してください」と携帯電話の番号もベガサス保育園つばさの園長に手渡した。以来、樋上医師は年3回の健診のために、保育園を訪問。診察と同時に、看護師や保育士の相談にのってきた。「たとえば、発達の遅れている赤ちゃんに、どんな運動の練習をすればよいのか、アドバイスしています。また、保護者のなかには、お子さんの障害をなかなか受け入れられない方もいらっしゃいます。そういう場合、どうサポートすればよいのか、スタッフの方々と一緒に考え、対策を練っています」と樋上医師。園長の清水は「樋上先生は、私たちにとってとても大きい存在です。看護師であつても、目の前の病状にどうすればよいか迷うときがあります。そんなときにいつでも電話で相談できることが、心の支えになっています」と話す。

医療的ケア児と 健常児を見つめた、 独自の保育を展開。

医療的ケア児と健常児を共に預かる保育園は、まだ全国でも数えるほどしかない。前例のない保育の難しさに、保育士た

ちはチームで乗り越えてきた。「最初の頃はどんな保育をすればよいか、まさに手探りの毎日でした。でも、大人とは違って子どもたちには、障害の壁は全くありません。分け隔てなく仲良くなつていく姿に、私たち大人は大いに教わりました」と清水は振り返る。

たとえば、運動会のあり方も、従来の保育園とは全くアプローチを変えた。「当初は、隣接するベガサス保育園との合同運動会が予定されていました。でも、合同にすると、走れないこと、動けないことばかり目立ちます。また保護者のなかには、わが子のできない姿を見せたくない、という方もいらっしゃいます。そこで、私たちはベガサス保育園つばさだけで、運動会というよりも、親子が触れ合うイベントをすることにしました」と清水は話す。

保育士たちが考えたプログラムは、大きな円形の布のふちをみんなで持つて遊ぶパラバルーンや、ハロウインの大きなカボチャをころがす親子競技など。自分でできる子は思いきり体を動かして、動かせない子は保護者と一緒に競技に参加し、みんなワイワイと楽しい時間を過ごすことができた。

医療的ケア児の 成長に合わせた 個別支援計画を立案。

ベガサス保育園つばさの運営において欠かせないのが、近接す

る「ベガサスレスパイトケアセンター」「ベガサスこどもデイセンター」の存在である。ベガサスレスパイトケアセンターの管理者である藤田里美（看護師）は児童

個別支援計画を立案し、児童デイサービスや保育園内でのリハビリテーションなどのサービスを組み合わせて提供。気になることがあるとベガサス保育園つばさにも顔を出し、園長等と綿密な打ち合わせをしている。

樋上敦紀医師は、発達障害の小児を数多く診てきた経験を活かし、一人ひとりを慎重に診察する。



「私でお役に立てるのであれば…」。

樋上小児科アレルギー科の樋上副院長は、ベガサス保育園つばさの園医を快く引き受けてくれた。



藤田管理者(写真右)は、ペガサス保育園つばさの立ち上げプロジェクトから参加。園内の設計にも深く関わり、必要な医療スペースやバギーが通れる廊下幅の確保などを助言してきた。

また、ペガサス保育園つばさの医療的ケア児は全員、ペガサスこどもデイセンターとペガサスレスパイトセンターの職員が送り迎えしている。子どもたちは朝夕、こどもデイセンターとレスパ

イトケアセンターに立ち寄り、おむつ交換、水分補給など必要なケアを受ける。たとえば、入浴サービスの必要な子どもたちは、ここで入浴していく。「重症心身障害児の場合、保護者の

方が保育園の送り迎えするのにも一苦労です。また気管切開したお子さんは、二人がかりでないとお風呂に入れることもできません。私たちがサポートすることで、お母さん方が少しでも

方が保育園の送り迎えするのにも一苦労です。また気管切開したお子さんは、二人がかりでないとお風呂に入れることもできません。私たちがサポートすることで、お母さん方が少しでも

また、子どものニーズの増加により、療養通所介護事業は、高齢者に関わる事業は「ペガサスレスパイトケアセンター」のままで、児童発達支援・放課後等デイサービスは、平成31年4月から「ペガサスこどもデイセンター」と名称を変

高齢者の支援から子どもの支援へ サービスを拡大。

安心して家事や仕事ができるように支援しています」と藤田は話す。

ペガサスでは、もともと医療と介護を両方必要とする高齢者に、訪問看護ステーションと協働して専門的なケアを提供する拠点として、「ペガサス療養通所介護」「ペガサスレスパイトケアセンター」を有していた。平成25年には、通所支援事業(児童発達支援・放課後等デイサービス・コラム参照)を開始し、高齢者から子どもまでサービスの対象を広げ、医療的ケアを必要とする子どもや家族のサポートに取り組んできた。藤田は子どもまでサービスの領域を

児童発達支援・放課後等デイサービスとは

心身に障害、または発達の遅れがある児童を対象に療育を行う、児童福祉法の通所支援事業。平成24年4月に児童福祉法改正により定められた、障害児支援の新しい体系である。

児童発達支援は6歳までの未就学児が対象で、放課後等デイサービスは小学校に入学する6歳から高等学校を卒業する18歳までの就学児が対象になっている。なお、子どもの状況しだいでは、20歳まで放課後等デイサービスが利用できる。

広げた経緯について次のように話す。「当時、重症心身障害児の支援をしているところはほとんどなく、誰かがやらなくてはと思いました。法人本部に相談したところ、すぐに『やりましょう』と了解を得ました。レスパイトとは、家族の一次的な休憩という意味です。医療的ケア児のお母さん方は、子どもの世話につきっきりで休むことができません。そんな家族を支えたいという気持ちを含めて、理事長の馬場が命名しました。」

小児科を持たない ペガサスグループの新たな挑戦。

ペガサス保育園つばさの事業母体は、社会医療法人ペガサスのグループ法人である、社会福祉法人風の馬である。

ペガサスグループは、なぜこの保育事業に取り組んだのか。そこには、地域において、重症心身障害児の家族支援が立ち遅れていることへの問題意識があった。

ペガサス保育園 つばさが誕生した きっかけとは。

ペガサス保育園つばさができたのは、堺市が「重症心身障害児対応の児童発達支援事業所を併設した小規模保育事業施設」の運営法人を募集したのがきっかけである。これは、政令指

定都市では初の試みだった。背景には、平成28年の児童福祉法の改正がある。この改正で、医療的ケア児の存在が初めて児童福祉法に明記され、自治体に医療的ケア児支援強化の努力義務が課されたのだ。

これを受けて、堺市が公募に乗り出し、手を挙げたのがペガサスグループだった。応募した理由について、田中恭子（社会福祉

法人風の馬理事 兼 社会医療法人ペガサス法人本部理事・企画運営局長 兼 馬場記念病院・事務部部长）は次のように話す。「堺市の方から話を聞いて、素晴らしい取り組みだと思いました。医療的ケア児にとって望ましい環境を提供できることはもちろん、健常児にとっても、医療的ケア児と過ごすことで、車椅子や体の障害をこく自然なこととして受け入れられるようになります。それは、障害のあるなしにかかわらず、多様性を認め合う共生社会を作る上で非常に意味のある教育だと思いました。また、私たちはこれまで子どもたちの通所支援事業を通じて、地域の重症心身障害児のご家族が抱える課題を身近に感じており、大きな問題意識を持っていました」。

ペガサスでは平成4年から院内保育所を、平成23年から一般の保育園を運営してきた。「そうした長年の経験の延長線上に、今回の挑戦があります」と理事の田中は話す。



地域の小児医療の充実のために
心血を注いできた樋上忍院長は、
ペガサスの取り組みを高く評価する。



樋上小児科アレルギー科は、院長の樋上 忍医師が昭和53年に開設した、歴史あるクリニック。
現在は、ご子息の敦紀医師(副院長)との二診体制で、新生児から小児、成人まで幅広く診療している。

NICUを出た後の、 在宅支援が足りない という現状。

地域の重症心身障害児の家族が抱える問題とは何か。この地域に深く根ざしてきた樋上小児科アレルギー科の院長であり、元堺市医師会長の要職を務めた樋上 忍医師に話を聞いた。「私たち小児科医は『4次医療がない』という言い方をします。新生児・小児医療を支える医療機関には、私たちのようなクリニックである1次医療機関、入院治療を担う2次医療機関、そして重症患者を診るNICUなどを備えた3次医療機関があります。そこを退院した後、重い障害を抱えながら生活していく子どもを支える体制、いわば4次にあたる医療・介護のバックアップが地域に充分にないんですね。もちろん訪問診療に力を注いでくださっている小児科の先生方はいらっしゃいます。でも、お母さんはずっと自宅でお子さんから片時も離れずにケアしなくてはならない現実があります。もちろん仕事にも行けないし、収入面の問題も発生します。医療的ケア

児の母親は、精神的・肉体的・経済的に大きな負担を強いられてきたのです」。

そうした状況を熟知していた忍院長は、ペガサス保育園つばさが誕生するという話を聞いて「画期的な取り組みだと思った」という。「地域に足りない部分、地域に必要な領域を、小児科を持たないペガサスさんが、率先して担ってください。地域のことを考え、ここまでやってくれるんだと感心しました。そこで、園医のご依頼にも、当院の副院長が喜んで引き受けることにしました」。

この樋上小児科アレルギー科とのパートナーシップが、「ペガサス保育園つばさの開園を大きく後押ししてくれた」と田中は話す。「ペガサス保育園つばさは、私たちだけでは作ることではできなかったと思います。医療面では、樋上先生のご協力があったからこそ、自信を持って開園できました。また、保育園の建設用地は、地域の方からお借りしているものです。一つの事業体ではできないことも、地域の方々と連携することで実現することができたと思います」。

これからの地域社会貢献を語る。

病気や障害のある人も、大人も子どもも、 安心して暮らせる未来へ。

馬場記念病院 院長(社会福祉法人風の馬理事長兼 社会医療法人ペガサス理事長)

馬場武彦

**地域社会のために、
誰かがやらねばならない
という思い。**

ペガサスグループは、小児科を
持たない馬場記念病院をハッ
クボーンとする。そのペガサスグ
ループが、なぜ医療的ケアを必
要とする子どもたちを支援す
る新たな保育事業に乗り出し
たのか。その根幹にある思いにつ
いて、改めてペガサスグループの
統括者である馬場武彦に聞いた。
「一言で言えば、地域が必要
とするならば、誰かがやらねば
ならない、という思いですね。正
確に言うと、誰かが始めなけれ
ばいけないと考えました。確か
に私たちは、小児科を持ってい
ません。しかし、そこは、樋上先

生をはじめ、地域の方々のご協
力を得ることでクリアできると
考えました。また、私たちには、

療養通所事業を通じ、障害を持
つ子どもと家族のサポートに取
り組んできた実績もあります。
地域と連携することで、地域に
必要なことを実現していこう。
それは、私たちペガサスの変わら
ない使命だと考えています」。

**病気や障害があっても
みんなが共に暮らす
地域を思い描いて。**

今回の保育事業の先に、馬
場が見つめるのはどんな地域の
未来だろうか。「それは、国の
目標でもあります。この地域
に、病気や障害を持つ人も、大
人も子どもも、みんなが安心し



て暮らせるような社会を作ることです。ペガサス保育園つばさは、その夢への足がかりとなりま

す」。この保育事業で、馬場は大きな手応えを得たという。「保育園の子どもたちの様子を見聞きすると、子ども同士の間には病気や障害の壁は全くなく、みんながごく自然に触れ合っています。病気や障害があるから、と考えるのは、むしろ私たち大人の方かもしれません。小さい頃から、このようにみんなが共に過ごす環境を作ること、めざす地域社会へ近づくのではないでしようか」。こう語った馬場は、一呼吸おいてさらに言葉を続ける。「時代の変化のなかで、医療のあり方、また、地域で生活することのコンセプトが変わりつつあります。地域における自助・互助・共助・公助の繋がりをどう築くか。もちろんいろいろな方々が、さまざまな形でやっていると思います。私たちペガサスは、医療をベースとしています。私たちがやるべきは、私たちなりのやり方で一歩を踏み出す、二歩に進める、そして続けていく。まだまだ手探りの段階ですが、これからも自分たちができることを、着実に取り組みんでいきたいと思っています」。馬場は地域の未来を見つめて、さらなる地域貢献を誓った。



医療から、そして、看護、介護から、 地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、そして、看護、介護に関連する事業所と連携をしています。

診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。

看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。

ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、快適な生活の場そのものをご提供により、皆さまを支援します。

第二特集では、こうした診療所、事業所をご紹介します。※診療所（アイウエオ順）として事業所の順で紹介しています。

耳・鼻のどの疾患を中心に 何でも診る町医者をめざして。

診療所

赤ちゃんからお年寄り
まで、幅広い年齢層の
患者さまを支えていく。

3代目院長を継承し、
昨年リニューアル。

南海本線諏訪ノ森駅から徒歩1分の好立地にある、とみやま耳鼻咽喉科。その歴史は古く、昭和4年に開業。平成30年9月、現院長の富山要二郎医師が3代目としてクリニックを継承した。リニューアルされた院内はすみずみまで居心地がよく、

待合室の一角にはキッズスペースも用意されている。「お子さんからお年寄りの方まで、幅広く診るのが当院の方針です。私が見たい患者さまは、年齢や性別に関わらず、小さなお子さんもかなり増えてきました」と、院長は話す。診察室には両サイドにモニターがあり、画像を映しながら治療方法を説明するスタイルで、とてもわかりやすい。子どもの診察時には、モニターにアニメなどを映し、治療の不安感を和らげるよう心がけているという。

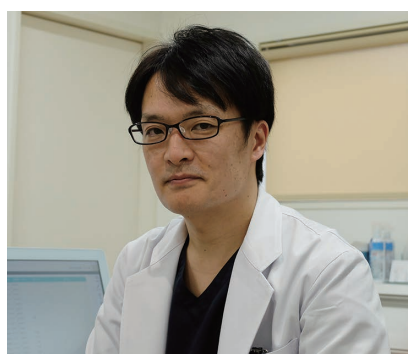
院長はクリニックを継承するまで、大阪大学医学部附属病院、大阪労災病院、堺市立病院（現 堺市立総合医療センター）などで、耳鼻咽喉科の専門医として豊富な経験を積んできた。専門分野は、甲状腺、咽頭・喉頭・口腔・鼻腔の腫瘍とがん。勤務医をしていた22年間の手術件数は、2500件以上に上る。現在も、そうした院長の実績を知る近くの診療所から、がんの疑いのある患者さまの紹介を受けることがあるという。「たとえば甲状腺がんの疑いがある場合、エコー検査、エコーガイド細胞診検査、血液検査などを駆使して甲状腺腫瘍の良性・悪性の鑑別を行っています。咽頭・喉頭・口腔・鼻腔のがん

については、ハイビジョン内視鏡システムなどを用いて検査を行います。勤務医時代の経験を活かし、小さながんも見逃すことなく早期発見に繋がっています」（院長）。

**さまざまな体の不調に
きめ細かく対応。**

耳鼻咽喉科は、狭い領域の診療科と思われがちだが、実際は耳鼻のどのに関わる疾患は多岐にわたったり、とみやま耳鼻咽喉科が手がける診療も実に幅広い。たとえば、小児に対しては、中耳炎、アレルギー鼻炎などの治療にきめ細かく対応。大人に対しては、耳鳴り、めまい、ちくちくの症をはじめ、風邪や咳など

身近な症状の悩みに対応している。また、聞こえが悪くなってきた高齢の患者さまに対しては、聴覚検査室で聴力テストを行い、適切な対策を立てている。「病院に勤務していたときと違って、今は地域の方々の日常的なお困りごとに対応できるだけ



応えることを第一に考えています。たとえば、赤ちゃんの耳あかを取ってほしい、花粉症が治まる薬を出してほしいなど、さまざまなニーズにお応えしています」と、院長。今は、患者さま一人ひとりとじっくり関わる診療所の仕事に、大きなやりがいを感じているという。「高齡の方から好きな演歌歌手の話を聞いたり、若いお母さんから育児の話を知りたりして、僕の方が楽しんだり、学んだりしています。また、皮膚の荒れなど、専門外の悩みを聞くこともありですが、その都度勉強して、できる範囲でお薬を処方するようになっています。これからも、気

軽に何でも相談していただける町医者として、地域の方々の役に立っていきたいと思います」。院長はどこまでも謙虚な姿勢で、地域に密着した診療所づくりにめざしていく構えだ。



とみやま耳鼻咽喉科

院長：富山要一郎
所在地：大阪府堺市西区浜寺諏訪森町中1丁112-3
TEL：072-265-3387
URL：<https://tomiyama-3387.com/>
診療科目：耳鼻咽喉科

内科と眼科の専門医が深く連携し、さまざまな患者さまにきめ細かく対応。

診療所

いろいろな相談できてみんなに信頼される存在になりたい。

内科・眼科にまたがる疾患にも幅広く対応。

堺市中区の住宅街に、平成30年5月にオープンしたましも内科・眼科クリニック。院長の

真下勝行医師はそれまで府中病院、馬場記念病院、大阪市立総合医療センター、大阪掖済会病院などの勤務医として高度な知識と技術を蓄積。内科消化器・内視鏡の専門医・指導医・評議員などの資格を取得してきた。そこで培った内視鏡の技術を活かすために、クリニックには最新の内視鏡検査機器を完



真下勝行院長

真下貴子副院長

備。「今まで内視鏡検査に関心はあつたけれど、病院は敷居が高くて行けなかった、という方から好評をいただいています。ポリープが見つかった場合、内視鏡的ポリープ切除術も当院で行っています」と、院長は話す。また、貧血の指標となるヘモグロビン量、糖尿病の治療指標となるヘモグロビンA1c（エーワンシー）の値が10分ほどでわかる血液の検査機器を置いており、診療に役立てている。

一方、副院長の真下貴子医師は、近畿大学医学部付属病院、PL病院で眼科の専門医として豊富な経験を積んできた。「当院の眼科には、目の疾患で来られる方と、内科と連携して診ている患者さまがいらつやいます。たとえば糖尿病になる

と、目の網膜の毛細血管が詰まるなど、さまざまな目の合併症が起きます。そういう場合、内科と眼科で同時に診られるのが当院の強みです」と話す。眼科ではそのほか、OCT（網膜）検査、視野検査装置を備え、緑内障などさまざまな目の疾患の早期発見に努めている。「定期的に通つてくださる方も徐々に増えてきました。これからはしっかり地域に根を下ろし、お困りの方を支えていきたいですね」と副院長は抱負を語る。

10年20年後を見据えたクリニックづくり。

クリニックの開設は、院長の長年の夢だったという。「病院ではどうしても、検査や診断という〈接点〉でしか患者さまと関わることができません。しかし本来、医師というものは、患者さまとじっくり話して、治療後も末永く見守る存在だと考えていました。ですから、いずれはクリニックを開くつもりでしたし、今はずっと毎日が充実しています」（院長）。

診察で心がけていることは、できる限り一人ひとりに時間をかけて、病気のことはもちろん、ご家族や生活の背景についてもじっくり話を聞くこと。ま



ましも内科・眼科クリニック

院長：真下勝行 副院長：真下貴子
所在地：大阪府堺市中区八田西町2丁6-46
TEL：072-276-5070
URL：<http://clinic-mashimo.com/>
診療科目：内科・消化器内科・眼科



た、患者さまが紹介先の病院で手術を受けるときは、できる限り病室までお見舞いに行くなど、親身で誠実なおつきあいを深めている。「患者さまのなかには、スーパードリに立ち寄って世間話をしていく方や、庭でとれたミカンを持ってきてくれる方もいます。そんなおつきあいができるのも、うれしいですね」とほほえむ。

将来の目標は、何だろうか。「地元の皆さんに愛されて、ここに来たら、何でも相談できるし、間違いがない。そう思っていただけクリニックになることです。それには10年20年かかるかもしれませんが、じっくりここに腰を据えて、副院長と力を合わせて、地域に根ざしたクリニックに成長していきたいと思えます」と、明るい声で語った。

ある日突然障害者になっても、
安心して暮らせる町づくりを。

事業所

中途障害者の「働きたい」を
実現するために、
これまでもこれからも。

三十余年の歴史を受け継ぎ
地域に深く根を下ろす。

中途障害者とは、人生の途中で突然、病気や事故により障害を持った人のことをいう。社会福祉法人麦の会は、その人たちの支援を昭和61年からスタートした。きっかけは、ある病院の脳卒中患者で組織された患者会のメンバーが発した「働きたい、働く場がほしい」という声から。当時、中途障害者の作業所は全国でもほとんどなく、発起人たちは東京まで見学に行き、作業所について一から勉強したという。その後、麦の会は社会福祉法人となり、現在は堺市内に4カ所の就労継続支援B型事業所(現時点で働くことが難しい人に、働く場所を提供する作業所)を展開。その他、障害を持つ人の自立を支援する指定特定・一般相談支援事業所を運営し、支援の領域を広げている。



管理者の辻 伯夫は、この33年間で事業を広げてきた経緯について次のように話す。「やはり社会が求めていたんだと思います。中途障害者を持つ人はここ堺市内だけでもかなりいらつしゃいます。そのうちの多くは、退院後、障害によって仕事を辞めざるを得なくて、家に閉じこもっています。そういう人が新たな生きがいを見出すには、麦の会のような働く場が必要です。みんなで一緒に作業をすることによって、その後の人生を少しでも好転させていくことができればと願っています。この仕事を通じて、辻がやりがいを感ずるのは、ご利用者の顔がどんどん変わっていくことだという。

「最初は戸惑っている人がほとんどですが、通うほどに皆さん明るく元気になっていきます。それを見るのが、何よりの喜びです」。

作業所の存在を知らせる
ために、発信していく。

麦の会の各作業所では、クッキーやパウンドケーキ、小麦ケーキなど焼き菓子の製造、箱の組み立てなどの内職を行っている。また、コミュニケーションカフェ「小麦」を運営し、地域の人々にコーヒーやお菓子を提供している。通所者の人数は常時、100名前後。脳卒中や難病、交通事故などにより中途障害を負った人を中心に、先天的に障害を持つ人も含め、多くの人たちの自立を支援している。

麦の会の今後の目標は、どんなことだろう。「この町に、こうした作業所があることをもっと広めていきたいですね。ある日突然障害者になる人は、作業所の存在を知らないし、自立への道筋をなかなか見つけることができませんから」。作業所の認知度を高め、地域との交流を深めるために、麦の会では自ら発信するイベントに力を注いでいる。たとえば、毎年11月には「麦の会作業所地域バザー」、毎年

3月には(麦の会を支える会)の主催で「チャリティー寄席」を開催している。「これからも、こうしたイベントを積極的に行いながら、地域に密着した作業所に育てていきたいですね。そして、中途で障害を持つようになっても安心して住める町づくりに貢献したいと思います」と、辻。(自分たちが働く場所を作ろう)という脳卒中患者の思いからスタートした麦の会は、その思いを大切に引き継ぎ、大きな花を咲かせている。



社会福祉法人 麦の会

管理者：辻 伯夫
所在地：大阪府堺市堺区神石市之町16-52
TEL：072-264-6407 URL：http://muginokai.net/
事業内容：就労継続支援B型事業所(4カ所)、
指定特定・一般相談支援事業所(1カ所)

つばさ 55
2019年初夏号
令和元年6月発行第15巻第1号
(通巻55号)

地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人 馬場武彦
編集長 塚本賢治
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
発行 HIPコーポレーション
社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558 http://www.pegasus.or.jp/

つばさ 55

地域医療を考えるペガサス情報誌

今、私たちの国では、超高齢社会を見つめて、
病気の人、障害を持つ人も、
みんなが協力し、繋がって生きていく社会を作ろうとしています。
でも本当は、大人も子どもも、すべての人が、
地域のなかで、その人らしく生きられる社会、
そのための仕組みを創る。
私はそこに目的があると考えます。

そのうえで、地域が必要としながらも、まだ実現されていないものに、
ペガサスとして果敢に挑戦します。
もちろん、ペガサスだけですべてができるわけではありません。
地域の方と手を結ぶ。
できなかったことが、できるようになり、
支えることができなかった方々を、
支えることができるようになると、信じます。

「すべてを支えているのは、人と、町とのきずなです」。
地域共生社会を見つめて、
ペガサスは、人と町とのきずなを大切に、
これからも挑戦を続けていきます。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦